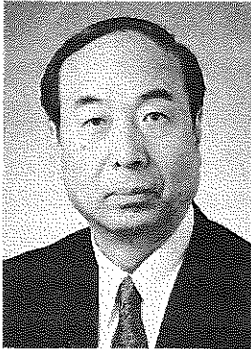


# 栃木県中学校長会報

〔役員所感〕

平成14年9月6日 発行 第97号  
栃木県中学校長会広報部

## 会長あいさつ



栃木県中学校長会長  
宇都宮市立一条中学校  
校長 谷 島 利 康

教育改革元年となる年を迎え、4月より新学習指導要領の本格実施と完全学校週5日制を実施しているところですが、新学習に入る前から、学力低下を危惧する声が強くなってきております。文科省では「学力向上のアピール」を発表し、保護者の間でも従来になく新教育課程への関心が高まっております。そこで、学校の説明責任も拡大している中、保護者や地域との新たな関係づくりの構築が求められているところです。

まずは文科省の「学びのすすめ」の趣旨を理解することが大切であり、また学力についても単なる知識や理解の観点だけでなく、これからの日本の国際化がさらに進む中で、子どもの主体性や自律性、「生きる力」を育むことが優先されるべきことや、これまでの学力観を大きく転換させる学習指導要領が始まったということを確認しておく必要があります。

学校を預かる校長として、今ほど手腕が発揮される時はありません。確かな教育理念と教職員の意識の改革により、教育力の高い特色ある学校を経営したいものです。基礎・基本を確実に身に付けること、さらに習熟の程度に応じて発展的な学習活動を準備することも学校の責任であります。保護者や地域社会から期待される学校教育としての役割を果たしていくためには、適切な評価によって成果と課題を明らかにし、説明していく必要もあります。

完全学校週5日制の実施により、新たな機能が求められております。それは、子どもの教育は、学校だけで負うのではなく、子どもの生活に関わる全ての大人が何らかの責任を負うべきものであり、学びの環境を、学校・家庭・地域社会をあげて豊かにしようとするものであります。校長としては、今まで以上に、学校外からの理解と協力を得ることが重要となります。

教育の大きな変革期だけに課題は山積しておりますが、校長会としては、各学校の情報交換を蜜にししながら、一丸となり、本県中学校教育の充実発展のため、努力して参りたいと考えております。

## 「人を育てる」とは



栃木県中学校長会副会長  
宇都宮市立宮の原中学校  
校長 堀 江 昌 子

老人が松の苗木を植えていた。通りがかった君主が老人に年齢を尋ねた。

「85歳になります」

君主は笑った。「その松が立派な材木になっても自分では

使えないだろうに」と。85翁は言った。

「国を治めている人のお言葉とも思えませぬ。私は自分の為ではなく、子孫の為に植えているのです。」

君主は恥じ入るほかはなかった。

(太宰治『産語』にある話より)

この話を職員に話し、さらに下記のような内容を付け加え、職員への講話とした。

人を育てる、我々教職にある者にとってもまた、かくの如しである。一人一人を丁寧に教育し、根づかせ、成長を促す。だが、そうして育てた人たちが担う時代の豊かさを、先人が享受することはない。

それでも人を育て続けなければならない。それは命を受け継いで後から来る者に対する、先行する・教育に携わる者の不可欠の責務と思われる、と。

我々校長は、自分の生き方、リーダーとしてのあり方などについて、これでいいのかという問いを絶えず持ち、自己を掘り下げて磨く。これが求心性といえるだろう。

求心性によって体得した心境や世界、それを教職員などに及ぼし、自分のレベルまで引き上げようとする。それが遠心性ではないか。

だが、遠心性を発揮すれば、必ず抵抗に出会う。そこで諦めてしまえば教育のダイナミズムは失われる。校長の向かう方向に教員を向かわせる。「自分と一緒に歩んでいこう」と教員に対していえる。求心性と遠心性を併せ備えた校長が、教育を発展させることができるのではないか。そして、これこそが真の意味で人を育てることではないだろうか。

人を育てることは別の角度からいえば、環境によって作られるのではなく、環境を作る人になるということだともいえよう。

最近、考えていることを少々、書いてみました。

〔役員雑感〕

先見性と風度



栃木県中学校長会副会長  
宇都宮市立陽北中学校  
校長 柿崎 龍夫

完全学校週5日制のもと、新学習指導要領が全面実施となり、教育改革元年がスタートしました。絶対評価の問題、学力向上、学校評議員制度、高校入試、生徒指導等、中学校教育の課題はまさに山積みしています。このような変革の時、リーダーとしての校長への期待は一段と高まってきております。

優れたリーダーになる条件はたくさんあります。行動力、決断力、危機管理能力、情熱等々、いずれも大切な事ばかりです。しかし、私は、この変革の時期にあって、もっとも求められていることは、先見性ではないかと思っています。先を読む力、洞察力、展望力です。時代の進歩・発展に対応する教育像・学校像にふさわしい「新しい学校を創る眼」を校長はもつこと、磨くことがより必要になってくると思います。

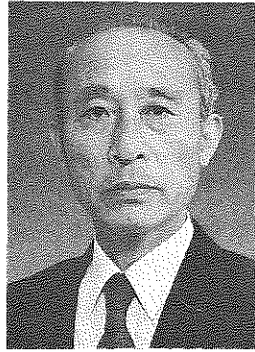
2年ほど前に、宮大工の小川三夫氏から講演会の前後に、楽屋で話を聞く機会を得ました。小川さんは、「大きな堂や塔を造る時には、柱はどうしても千年、二千年持つ檜が必要で、二百年、三百年ほどしたら屋根の重みが柱にどのくらいかかるか、計算して仕上げる。もちろん自分は生きていない気の遠くなるような時間が経過した後のことになる。後世に残るような大仕事をやることは、それだけ先をよんで、計算し尽くした上でやらなければならない」といったことを話しておられました。

その年の暮れにどうしても行きたくなくて、法隆寺、薬師寺等の柱を自戒にこめて、しみじみと眺めてきました。

作家の童門冬二は、「時代の転換期にいる教育者は、これらのリーダーとしての条件に加えて、〇〇なら！と思わせるその人らしさをぜひ持ってほしい。らしさは特性であり、人間としての魅力です。江戸時代の寺子屋は、まさにその典型です。」「中国の言葉でこれを『風度』という、つまり、この校長なら、と思わせる人が多ければ多いほど、風度が高いということ」と「私の教育観」の中で書いています。

難しいことですが、学校経営に、この2つのことを生かしていければいいと考えています。

〔退任に当たって〕



栃木県中学校長会会長  
前宇都宮市立星が丘中学校  
校長 須藤 光弘

過ぎたる日々を振り返ると短く感じるものだと聞いてはいたが、正に実感しているこの頃である。不思議なもので、脳裏をよぎるのは38年前の初任地のことである。当時の教え子は52歳になっている。時は東京オリンピック開催年・新幹線開通等、高度経済成長期であったが、農村地区の大沢はゆったりした暖かい包容力があり、教職員と地域住民の円満な人間関係の中で子ども達は伸びやかに育っていった。地区により同姓が多く、我がクラスも半数はF姓のため、呼名は名前の呼び捨て、子ども同士も兄弟姉妹のごとき振る舞い、宿直の晩や自主キャンプを通して文字どおり寝食を共にした仲間には、喧嘩はあったがいじめも不登校もなかった。クラスの半分は就職、半分は進学(内半分は私立)であった。農家の関係で朝5時を過ぎれば登校してくる子が多かった。数年後に、初めて自分の手で作ったという曲がったキュウリを送ってくれた事や、10年程前の同級会で、毎朝、手作りの歌集で教えた山の歌を忘れずに歌ってくれた事に感動したことや、稲刈りやセンブリ摘みで部費を稼ぎ、野外観察と称して猪倉の林でのチタケ採り、高知山で峰に追われた話題も今は良き思い出である。

昨今、「ゆとりと多忙感」「奉仕体験活動の義務化」の文字を目にする事が多くなった。社会の変遷の所以であろうが、一昔前の職員室にはない言葉である。当時の新採教員は、月に数日しか帰宅できず(常直に近く)昼夜を通して勤務したが、精神的なゆとりと、目標を達成した成成感はあっても多忙感はなかった。教職員も親も生徒も共に互助の精神が行き届いており、毎日が自発性に基づく奉仕体験活動であった。

美田を残された社会に、昔の社会環境に戻れといっても無理であろうが、経済の成長と、文化の進展の陰に希薄になった昔の良さ(日本の良さ)を再考する事は大いに賛成するが、教育課程に義務としての位置付けや、教職員への奉仕体験研修への位置付け、更には、高校入試への評価の導入等はいかがなものかと思う。まだまだ新しい課題が山積みの中で身を引くことは、後ろ髪を引かれる思いであるが、校長会員の皆様が一丸となって対応していただける事を祈念し、校長会の運営や、昨年度の関東地区栃木大会でのご支援とご協力に感謝しつつ退任の挨拶とします。

〔関ブロ・新潟大会の報告〕

事務局長 小林 幸正(宇・旭中)  
関東甲信越地区中学校長会第46回総会・第54回研究協議会新潟大会は、平成14年6月19日(水)～21日(金)、米百表で有名な新潟県長岡市で開催され、本県から延べ55名が参加した。

本大会から、大会事務局は、次期開催県が本大会総会後半から次年度自県開催総会前半まで担当するようになった。これまで開催県は、自県総会後半から次年度他県開催総会前半まで事務局担当であったが、検討され改善されたものである。

そのため今回総会では、前会長への感謝状授与が、まず本県須藤前会長に対して新潟の松田会長が、次いで松田会長に対して時期開催県群馬の星野新会長が行うという、変則的なものとなった。なお、昨年度開催の本県の本年度開催の新潟への事務引継ぎは、昨年12月に終了している。

大会第1日目の会計監査・理事会・総会には、本県から、須藤光弘(前)副会長、永野勝巳(前)幹事、角田昭夫(前)幹事、谷島利康理事、小林幸正監事、総会には6名の代議員が出席した。

第2日目は、長岡市立劇場大ホールに1,000名が集い、「[生きる力]をはぐくみ、新しい時代を拓く心を育てる」を協議題とする研究協議会が開催された。

開会式・文部科学省説明ののち、全体協議では、開催県新潟から、2カ年にわたる『他律から自律』をキーワードとする研究実践を通じた提案があった。

午後の分科会では、各会場で熱心に討議がなされ、第9分科会(現職教育)では、研究協議題「教職員の意識改革と資質能力の向上」のもと、「教育改革を推薦する指導体制」の視点から、本県から氏家町立氏家中学校岡田正校長の司会により、船生中学校大森敏校長が、塩谷地区の取り組みの成果を踏まえて提案された。会場は、地域の特性をめぐる苦心や工夫の実情が話題になった。おわりに大谷全日中給対部長、谷島本県会長から、校長のリーダーシップ等のまとめの話があった。

第3日目の全体会は、各文科会の内容と今後の課題が示された後、「21世紀の中学校に期待すること」と題した、早稲田大学多賀秀敏教授の講演があり、多くの成果を収め新潟大会は終了した。

〔専門部の活動計画〕

◆ 総務部  
部長 柿崎 龍夫(宇・陽北中)  
平成14年4月24日、県教育会館において第1回総務部会を開催し、役員選出及び事業内容について協議を行った。

- 1 平成14年度役員  
部長 柿崎 龍夫(宇・陽北中)  
副部長 江面 一雄(河・古里中)  
副部長 中沼 利栄(上・鹿、北中)
- 2 事業内容
  - (1) 県中学校長会要望書案の策定(義教振・教福教要望書への意見集約)
  - (2) 行政当局をはじめとする県内各関係機関への要望活動の推進
  - (3) 県中学校長会の次年度の運営方針、活動の重点の検討と立案
- 3 事業計画
  - (1) 県職員福利厚生事業推進協議会作成の「教職員福利厚生事業充実に関する要望書」への意見集約(6月・7月)
  - (2) 義務教育振興協議会要望書起草委員会への意見集約(6月・7月・9月)
  - (3) 第2回総務部会(7/8)  
県中学校長会要望書案の策定
  - (4) 県教委義務教育課等への要望活動(8/19)
  - (5) 知事部局、県議会関係者等への要望活動(9月)
  - (6) 各地区の関係機関への要望活動(9月、10月)
  - (7) 第3回総務部会(9月)  
平成15年度の運営方針・活動の重点等の案策定
  - (8) 第4回総務部会(12月)  
平成15年度の運営方針・活動の重点等の案決定
  - (9) 理事・協議員会にて運営方針、活動の重点の決定(2月)

◆ 調査部  
部長 定岡 明義(宇・陽西中)  
1 役員の選出と事業計画の作成  
平成14年4月23日、栃木県教育会館において調査部会を開催し、本年度の組織及び事業計画を協議し、次のように決定した。  
(1) 役員  
部長 定岡 明義(宇・陽西中)

- 副部長 久保田 宏(河・本郷中)  
 “ 高田 雄 康(上・日光東中)
- (2) 事業計画  
 ア 全日中教育情報部が全国で実施する「中学校教育に関する調査」に応じ、本県の状況を調査し報告する。  
 イ 県中学校長会及び各専門部に必要な調査と資料を提供する。  
 ウ 他の都道府県中学校長会及び各教育関係団体との連携・協力並びに資料・情報の交換等を実施する。  
 エ 各種調査結果及び資料収集、情報の提供や配布等を実施する。

- 2 「中学校教育に関する調査」について  
 本調査は、全日本中学校長会教育情報部が全国で実施するもので、本年度は下記の項目について調査し回答した。  
 なお、回答にあたっては県教育委員会に多大な協力を得たものである。  
 (1) 平成14年度の栃木県の教育費。(2) 平成14年度の公立中学校学級数別教員定数。(3) 特別配当教諭の制度。(4) 教員に対する県教委の異動方針。(5) 教員一人あたりの旅費。(6) 教員の待遇。(7) 教員の退職。等

◆ 研修部

- 部長 犬塚 恒士(宇・城山中)
- 1 平成14年度役員  
 部長 犬塚 恒士(宇・城山中)  
 副部長 大貫 良明(上・粕尾中)  
 “ 添谷 勇(芳・須藤中)
- 2 平成14年度活動計画  
 (1) 研究テーマ  
 「生きる力」をはぐくみ、新しい時代を拓く心を育てる中学校教育  
 研究の視点  
 生徒に豊かな人間性の基礎・基本を身に付け主体性や個性を生かす特色ある教育活動を展開し、自ら学び考え「生きる力」を育む中学校教育の創造  
 (2) 主な研究活動  
 ア 第24回栃木県中学校長会研究大会の開催  
 ○期 日 平成14年9月6日(金)  
 ○会 場 栃木県子ども総合科学館  
 ○内 容  
 ・午前 - 全体会

- 宇河地区、南那須地区、下都賀地区による研究発表  
 ・午後① - 分科会協議  
 3分科会に分かれ研究協議  
 ・午後② - 講演  
 大場敏治氏(群馬社会福祉短期大学教授)による講演
- イ 研究収録の作成  
 ・第24回研究大会の概要  
 ・各地区の研究内容
- ウ 研究テーマの検討  
 次年度の研究テーマの検討・策定

◆ 事業部

- 部長 中山 一郎(宇・国本中)  
 平成14年4月24日(火)教育会館において事業部会を開き、前年度までの事業の継承の必要性を確認し、本年度の組織及び事業計画を次のように決定した。

- 1 役員  
 部長 中山 一郎(宇・国本中)  
 副部長 齋藤 雄介(河・河内中)  
 “ 佐藤 勇治(足・山辺中)
- 2 事業計画  
 研修会の開催「退職後の生活設計について」  
 (1) 日 時 平成14年12月12日(休)  
 13:00~16:00  
 (2) 会 場 栃木県教育会館 3階大会議室  
 (3) 参加者 栃木県中学校長会会員(希望者)  
 (4) 内 容  
 ア あいさつ  
 ・栃木県中学校長会長  
 ・栃木県教育委員会福利課長  
 イ 講 話  
 栃木県教育委員会福利課担当職員(予定)  
 (ア) 医療保険について  
 ・退職後の医療について ・任意継続組合員制度について ・継続医療制度について  
 (イ) 退職手当について  
 ・退職手当について ・退職手当の算出について ・各種の税について  
 (ウ) 年金制度について  
 ・退職共済年金の内容と仕組みについて  
 ・退職共済年金の支給について  
 (エ) 教育福祉振興退職者部会について  
 ・退職者部会について  
 ・退職者の加入の仕方について

- (閉) その他  
 ウ 質疑応答

◆ 広報部

- 部長 橋本 忠良(河・南河内中)  
 平成14年4月23日(火)に、下記のように新役員を決定し、次いで平成14年7月9日(火)南河内中学校にて、第一回広報部会を開催した。協議の結果、本年度の(組織及び)事業計画を次のように構想した。
1. 平成14年度の役員  
 部長 橋本 忠良(河・南河内中)  
 副部長 下司 恵子(宇・瑞穂野中)  
 “ 江田 美智男(栃・吹上中)
2. 今年度の会報発行の構想  
 (1) 発行回数は2回とする。  
 ・第97号、第98号とする。  
 ・内容はこれまでとほぼ同じとする。  
 (2) 発行予定日  
 ・第97号 平成14年9月初旬  
 ・第98号 平成15年2月中旬  
 (3) 各号の主な内容について  
 ① 第97号  
 ・役員所感  
 ・各専門部の活動計画  
 ・退任に当たって  
 ・新任校長のひとこと  
 ・私の朝会訓話  
 ・全関東研究協議会(新潟大会)の参加報告  
 ② 第98号  
 ・役員所感  
 ・各専門部の活動報告  
 ・全日中研究協議会(島根大会)の参加報告  
 ・研究学校の発表概要  
 ・海外研修視察記

◆ 進路対策部

- 部長 戸村 武夫(那・金田南中)  
 平成14年4月23日(火)栃木県教育会館において第1回の部会を開催し、本年度の組織及び事業計画について協議し次のように決定した。
- 1 平成14年度役員  
 部長 戸村 武夫(那・金田南中)  
 副部長 大出 尚美(小・小山第二中)  
 “ 大塚 正則(河・明治中)
- 2 本年度の事業計画  
 研究テーマ「中学校進路指導の適正な推進と高

校教育改革への提言」

- 第1回研修会  
 ア 期 日 平成14年7月9日(火)  
 イ 場 所 栃木県教育会館  
 ウ 内 容  
 ・今年度の事業計画の確認 ・昨年度の研修のまとめの確認と今後の課題について ・私立高校調査書様式について ・県立高校及び私立高校調査者選抜に関すること ・その他情報交換
- 第2回研修会  
 ア 期 日 平成14年10月22日(火)  
 イ 場 所 栃木県教育会館  
 ウ 内 容  
 ・県内全中学校に、私立高校入学者選抜に関するアンケート調査を依頼したものを部会でまとめ、そして検討し、要望事項として、私学連役員に要望する。
- 第3回研修会  
 ア 期 日 平成14年12月5日(休)  
 イ 場 所 栃木県教育会館  
 ウ 内 容  
 ・県立高校の入学選抜についてのまとめ  
 ・平成13年度卒業生の進路状況について  
 ・その他

◆ 生徒指導部

- 部長 神長 利光(河・上河内中)  
 平成14年4月23日(火)栃木県教育会館において第一回の部会を開催し、本年度の組織及び事業計画について協議した。  
 その結果、ほぼ前年度の事業内容を継承することになり、概ね次のように決定した。
- 1 役員  
 部長 神長 利光(河・上河内中)  
 副部長 酒井 一行(下・石橋中)  
 “ 高田 林平(南・荒川中)
- 2 研修計画  
 (1) 平成14年度研修課題  
 ・いじめ問題及び不登校等学校不適応生徒への適切な指導と対応  
 ・学校の危機管理  
 (2) 第二回部会研修会  
 平成14年10月22日(火)  
 栃木県教育会館

(3) 研究の方向

研修課題について、各校で取り組んでいる研究実践例を発表しあい、課題解決に役立てる。

主な話し合い事例として次のようなものが挙げられる。

- ・課題解決のための校内指導体制及び地域との連携の具体例
- ・各種専門機関との連携
- ・「スクールカウンセラー」及び「心の教室相談員」との連携
- ・生徒指導に関する特色ある教育活動の実践事例
- ・学校の危機管理

(4) その他

- ・平成15年度版「生徒手帳」の編集会議

◆ 修学旅行部

部長 真壁敏夫(宇・姿川中)

1. 役員

部長 真壁敏夫(宇・姿川中)

次長 後藤明(宇・雀宮中)

副部長 小堀悠次(逆川中)

〃 田中耕一(下・小山城南中)

2. 事業計画

- 4月23日 県修学旅行部会(教育会館)  
役員選出、事業計画、関東修学旅行委員会役員選出
- 6月7日 関東修学旅行委員会総会並びに第一回研究協議会(千葉市)
- 6月23日 修学旅行申し込みの説明(教育会館)
- 7月12日 三地区総会(東京)
- 7月18日 平成16年度修学旅行輸送申込締め切り  
修学旅行実施状況報告書締め切り
- 9月20日 輸送計画調整(東京)
- 10月7日 茨城県との輸送計画調整(プラザインくろかみ)
- 10月17日 平成16年度輸送計画決定
- 11月15日 第17回全国修学旅行研究大会埼玉大会(さいたま市)
- 11月29日 「平成16年度修学旅行新幹線輸送計画書」配布
- 1月 「関西の旅の申込書」配布
- 2月21日 年間行事活動反省と新年度対策  
平成15年度11月17日(予定) 関東修学旅行研究大会栃木大会(プラザインくろかみ)の打ち合わせ  
を関東修学旅行委員会ともつ予定である。

〔新任校長の一言〕

塩谷町立玉生中学校長 松井洋三

奇しくも「教育新生元年」の年に新任校長としてスタートを切ることになり、不安で一杯でした。新学習指導要領で学校は変わりましたが、教職員の意識が変わらなければそれを確実に定着させることはできません。校長の役目として教職員の意識改革が大きく取り上げられているのもそのためであり、学校経営の重さをひしひしと感じさせられました。

常日頃どういう意識で教育活動に臨んでいくべきかと考えていた折、船田先生が教育とちぎに昔書かれていた言を拝読させていただきました。そこには

教師は子どもの人生にかかわる

医師は人の命にかかわる

教師は子どもの人生にかかわる

教師の秤が小さければ少ししか汲み取れない

子どもを見る目が昏ければ 何も見えない

子どもを見る目を深く広く豊かにしたい

失敗をいたずらに責めるのではない

再起のチャンスを与えるのが教育

「勉強ができないのは子どものせいだ、親が悪い」

などと決めつけるのは教師の傲慢であり

怠慢である

泣き泣き評点「1」をつけるような

教師の姿は輝き、拜むようにありがたい

子どもの問題はすべて親の問題であり

同様に教師にもかかわる問題である

人を教えるということは、つきつめれば

「詫び」と「祈り」ではないだろうか。

こう記されていました。

子どもに対する深い愛情のことばであり、このような考え方こそ、子どもを預かる教職員として一番大事なことであると感じました。人間として成長する時期に、愛を降り注がれ、初めて生き生きと育つという、当たり前のことを再認識させられました。

先生方にも是非、このことをもう一度噛み締めていただこうと提示しました。『玉のような玉中生を磨くために』という考えを基に、生徒一人一人をかけたえのない存在として大切にすることを指導の基本として、豊かな人間性や自ら学び自ら考えるなどの『生きる力』を育成する教育活動に取り組んでほしいと。

4か月過ぎた今、先生方の熱心な取り組みにただ感謝しているところです。

黒磯市立東那須野中学校長 荒井親寛

今春、新任の校長として母校に着任した。

少子化問題が叫ばれている昨今、着任した母校も例に漏れず生徒数376名、毎年減少してきている。

このことに一抹の寂しさを感じたと言ったら少し大げさかもしれないが、50数年の歴史を有する母校である。校地内の樹木は、太く遅く枝を茂らせ、確実に生育していることが確認できた。生徒も然り。明るく穏やかな顔をしていて、那須野が原の恵みをいっぱい享受し、育てられていると思われる生徒が目立った。

坂口安吾の『風と光と二十歳の私と』ではないが、老年に差しかかった私の心にも、「よし、ここでやるぞ。生徒のやる気が溢れる学校をつくるぞ」と、妙に清生とした若い頃の心の在り様になっていたのが、着任の日のことである。

今年度は、新しい教育スタートの年である。

市内全中学校に学校評議員制度を導入すると市の教委の方針の下、5人の評議員に教育長からの委嘱状を手渡し、過日、本校でも発足させた。

その際、学校経営について説明をし、質問に答えながら、地域の方々の学校によせる期待の大きさを直接肌で感じた。この大きな期待に応えることは容易なことではないが、教職員一丸となって教育効果を上げていきたいものだと思つた。

学校という組織体、これをいかに機能させ生かしていくかが、教育効果と直結している。「報告・連絡・相談」の徹底はこの意味において肝要である。このことがあって初めて、教職員相互の信頼と協力も生まれる。

このような職員の結束に加えて、先生方おのおのがもっている力量と教育愛・魅力的な個性を十分に発揮してもらいたいと思う。つまり、先生方お互いが連携し、生き生きと教育活動を展開することによって、生徒一人一人が生き生きと活動し、居がいを感じる学校の具現化を図っていき、ということをやりたい。

こういう時代である。学校経営上の課題は少なくない。困難な課題に対しても焦らず、「道は邇きに在り」(孟子)である。足下から、日々の教育活動の一つ一つを着実に進めていくことこそ大切なのだと考えている。一步一步確かな足取りで歩いていきたい。

田沼町立西中学校長 阿部茂

久しぶりに中学校に戻ってきたというところが実感である。新任から中学校に20年勤務し、小学校・他で10年を経ての里帰りである。この10年で中学校も様変わりをした。完全学校週5日制、新指導要領の完全実施となったこの一学期、学校経営のうえで各先生方の協力が不可欠であった。まず、本校の教育課程や生徒の実態を最も理解していないのが“私”という現実から始まった。毎日が新しいことの発見という聞こえがいいが、実は焦りと不安の毎日であったというのが正直なところである。

さて、本年度は教育改革元年と言われ、トップダウンの指示事項が相変わらず多い中での意識及び実践の改革を迫られている。そんな折、先日の全日本中学校長会や関プロ中学校長会でふと感じたことであるが、文科省説明のなかで、我々がずっと以前から熱意を持って指導実践し今後も変わらず継続していくであろう教育活動について何も触れていないことである。(新しい施策の説明だからなくて当たり前前といえばそれまでであるが釈然としない。)具体例をあげるならば部活動指導がその代表である。この部活動について文科省は「教育課程にはないが重要な学校教育活動である」と認めてはいるが、そのことに我々がどれだけエネルギーを費やしているか(費やさざるを得ないか)、かつ、その教育効果がどれほど大きいかを認識していないのではないかなと思う。学校週5日制は名ばかりで休日に教師・生徒共々懸命に汗水たらしている実態などは知る由もないからなのか。憤懣やるかたない思いである。

不易と流行という観点からすると、従来から教育的評価や価値が高く、今後も消滅することがないのであるものは不易と言える。新学習指導要領が目指すもののなかには、復活した? 「不易」が見られ、こんな短いスパンでも歴史は繰り返すのかと驚いてしまう。本来、不易なるものは不変であるのだが…

ひとつ憂慮すべきことがある。それは、絶対評価の妥当性や信憑性への懐疑及び学力低下論の影響のせい、公立高等学校の推薦入学を含む入学試験やそれに付随する調査書の扱いが、中学校の意に反した方向に進んでいることである。文科省が目指しているこれからの教育のあるべき姿(生きる力の育成や心の教育等)が、高等学校においてははさして重要ではないというのか。ペーパーテスト偏重による旧来のふるい落とし入試に逆戻りするという現実に対して愕然としているのは私だけではないはずである。それとも義務教育と高等教育は人間教育として目指すところが異なるというのか。新任校長として真剣に迷っている。

佐野市立吾妻中学校長 富田 治 夫

新米校長としての第1学期(4か月)が、どうか無事に終了でき、ほっとしています。昨年1年間、教頭として本校に勤務していたので、生徒たちの様子もある程度分かっておりましたし、職員やPTA、地域の皆さんとも気心も知れており、その意味では新任校長としての不安が少しは軽減したかも知れません。また、幸いにも佐野地区の先輩校長先生方は素晴らしい人格と識見の方ばかりで、校長先生方から、研修会や出張の行き帰りの車の中で、校長としての心構えと心得、学校経営全般に対しての温かいアドバイス等をたくさんいただきました。本当に心から感謝しています。

それにしましても、校長の出張の多さには正直びっくりもし、多少は閉口しています。どなたかが、笑いながら「非常勤校長ですねー」と言っていました。あながち冗談とも思えません。

4月1日、平成14年度スタートにあたって、先生方に、「一人一人の生徒が持っているであろう“しなやかな感性”をぜひとも導き出してほしい。そのためにも、生徒と“心と心のキャッチボール”を心がけてほしい。」とお願いした手前、私も教頭時代と同様に、可能な限り教室へ補教に行き生徒と一緒に数学の問題を解いたり、放課後は部活動に行きさわやかな汗を流そうとしましたが、なかなか十分にというわけにはいきませんでした。でも、わずかですが、満足感が残りました。今後も何とか続けていきたいと考えております。

吾妻地区は市街地より離れた農村地区にあり、豊かで閑静な自然に恵まれており、学習するには最適な場所ですが、生徒数の減少が進み、今年度は70名です。小規模校には小規模校なりの悩みもいろいろありますが、生徒の数が少なければ少ないほど一人一人の生徒が「たからもの」に見えてきますから不思議です。この70個の本物の「たからもの」、そして、140個の瞳に一点のくもりも出ぬように願いながら、一歩ずつ、そして一途に努力していきたいと思っております。



## 〔私の朝会訓話〕

### 単文・平易な語彙で

鹿沼市立東中学校長 三 添 憲 公

私が教員になった頃は、確か毎週月曜日の朝が「朝礼」で、校長が朝礼訓話をしていたように記憶している。今思うと、というより、校長という同じ立場に立ってみて、よくぞ毎週話のネタに欠かかなかったものと大先輩校長に脱帽の思いがする。

ただ、大先輩たちも、やはり苦労はしていたようだ。私の知る限り、何名もの校長が、同じネタを繰り返された記憶が残っている。知らず知らずのうちに繰り返されたのか、それとも意図的になされたのかは、今はもう知る由もない。

さて、私の場合、前任校でも、また現任校でも、朝会・朝礼なるものはなく、その代わり、学期に2回程度の全校集会在学校暦に位置付けられている。この他に、生徒に直接話をする機会としては、儀式的行事や体育的行事時の「校長先生のお話」と生徒会総会くらいなもので、本当に数えるほどしかない。

本当に少ない機会であるので、自分の思いを生徒に伝えたいと考えている。それで、本を読んだ感想や内容紹介的なことは一切せずに、常々考えていることを、単文を使い、できるだけやさしい言葉を選び、3～5分間話をするように心がけている。

話を聞いていない生徒はもちろんいる。しかし、しっかり聞いて、自分なりに消化している生徒もまた確実にいる。卒業時や、年賀状・暑中見舞いなどで、講話内容に触れてくる生徒がいたりすると、その重みを実感する。

### 〔編集後記〕

今年の夏は、文字通りの猛暑となり、静岡のある町では、体温を超える39度を記録したと報じられました。各先生方は、今年の厳しさをどのように乗り越えられたでしょうか。

完全学校週5日制の実施、絶対評価による通知表、学校評議員制度の導入など、大きく変化した1学期でした。反省点をぜひ2学期に生かしたいものです。

玉生中学校の松井校長先生は、「新任校長の一言」で、以前「教育とちぎ」に書かれた船田先生のお言葉「教師は子どもの人生にかかわる」に始まる文章を御紹介されています。今、変革の時だからこそ熟読含味したい文章ではないかと思えます。(橋本)